第一章　風　土

序　章

柳津町は長い歴史と文化をもって今日に至っている。しかしそこには自然とのかかわり合いを持たない事象は何一つない。その自然といかに適応しつつ文化や経済を進めて来たか、そこに柳津の人々の型がある。その型は自然的条件の制約が今日という文化の発達した時代においても考えられる。

水害という一つの自然的条件を見ても柳津には柳津の特異な水害の現象があり、そのために悩まされ、またその水害から立ち上り、また悩まされ、そして今日の文化景観をつくって生活の方向を見い出し、柳津の人と自然の間には調和のとれた風土を作ろうとしたのである。そこには民間信仰が生れ、土木事業も、宗教も生れて来た歩みを忘れてはなるまい。

そうした意味に風土を捉え、生活基盤をなす自然現象をいくつか取上げて次章以下の歴史・集落誌・政治・文化の基底をなす条件を追及して柳津町誌の序章としたい。

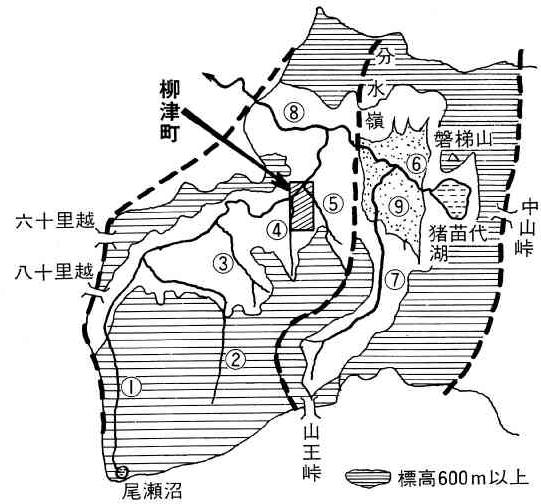
雪国の風土とその適応（奥之院弁天堂）

第一節　地理的位置と風土

(一)　裏日本型

会津全体が福島県の西部を占め、奥羽山脈の大分水嶺の西側に位置して日橋川・大川・只見川は合して阿賀野川となり越後山脈に峡谷を作って横断し日本海に注いでいる。柳津町と越後平野とは越後山脈によって分離しているが只見川流域は全般的に風土のすべてが東北日本の裏日本型を呈していると見てよかろう。

更に裏日本型の中においても奥羽山脈と越後山脈によって囲まれている盆地列（会津盆地・米沢盆地・山形盆地）と西部山地とに分ける場合は、わが柳津町は深雪地域である西部山地としての性格をもっている。



柳津町の地理的位置

一方現在の交通上の推移を見るに鉄道只見線の開通、国道二五二号線の完成、国道四九号線の全面舗装により東京及び新潟への交通上に大きな変化を来し、物資の輸送経路も変化し商業圏の拡大等によって観光圏・信仰圏も大きな変化を来している。これ等大幹線に即応しつつ町の支線道路の整備を充実すれば、更にその機能が大きく期待される。

数理的位置から見れば東経一三九度三六分より一三九度四六分。北緯三七度二一分より三七度三五分の間にあり地球全体から見て北半球の位置的制約はまぬがれることはできない。

第二節　地形と風土

(一)　侵蝕地形

一般に山地地形の形態をなし平地は河岸段丘に見られる位で少なく、河川の一部分に堆積する沖積平地がある程度でその他は傾斜地や峡谷の形式をなしている。標高五〇〇メートル以上の面積が五二パーセントも占め、耕作景や居住の上に大きな影響がある。

又、標高は最高一、四八二メートル（博士山）から最低一九〇メートルを示し、河川の侵蝕が激しく、上流はV字谷となり堆積が見られず、ただ只見川沿岸の一部に堆積層があり耕作に利点を与えている。山地においては渓谷に沿って棚田を作り日照時間も少なく小規模な水田耕作をなし、この地域の基盤整備も近年行われているが道

(二)　交通上の要衝

越後山脈を侵蝕ししかもほぼ東西に走る只見川の作った峡谷は、山嶺を利用した交通から川に沿った交通に移った場合の重要な交通路となり、越後文化とは八十里・六十里越によって結ばれ、上方文化の流入に好条件をもたらしている。

一方阿賀野川を遡った越文化は会津盆地を通り更に中山峠を越えて中通りに通じ、関東の文化は山王峠を越えて会津に流通したと見るべきであろう。

そうした交通上からすれば柳津町の地理的位置は只見川の玄関的集落として、お蔵入りの関門をなし会津盆地への漸移地帯とも見られる要衝の地域である。

路の改良と共に地形上の支障条件となっている。

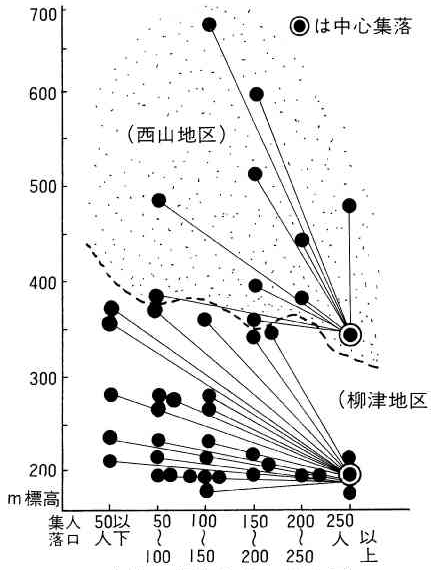
集落の移動系統は下部より上部への形態を見せ、最高七〇〇メートルの標高を持つ集落もある。又標高の高い南面の斜面などを利用して焼畑耕作の跡が今も見られる。そうした関係で集落の標高差も甚しい。

特に西山地区は一般に標高が高く、集落もほとんど四〇〇メートル以上にあり冷涼地域となっている。高森地区はそうした気候を利用して高原大根・高原トマトの栽培が行われる。

柳津地区は標高三〇〇メートル以下に集落が多く、しかも小地形を利用して小集落化の現象がみられる。

標高と面積

標高分類	面積	百分率
500 m以上	89 km²	52 %
300 m～500 m	56	32
300 m以下	25	16
計	170	100

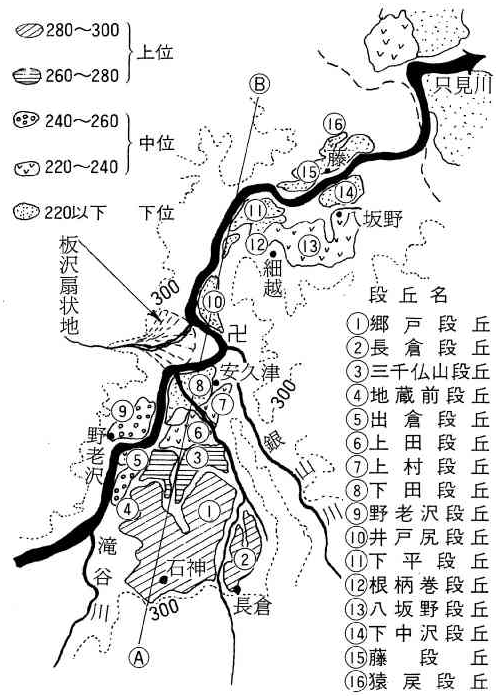


集落の標高と人口分布図

(二) 河岸段丘

標高四〇〇メートル近くの高地を調べて見ると礫層が発見される（小巻の牧野、長倉の峠等）。これは現在の只見川の水位は標高一八五メートルの位置であるが、かつてはもっと高地を流れ、越後山塊の隆起が行われるにつれて侵蝕の復活が見られ、流路の変化があったものとされている。その際蛇行が伴われ、高い地点より段丘を残して来た地形である。この河岸段丘の地形は郷戸原をはじめ、上田・下田と漸次標式的な段丘群をなしている。

只見川において段丘群の標式的なものは三島町の宮下地区・柳津・片門地区であって、この地区は只見川流域では最も河岸段丘の発達した地域である。

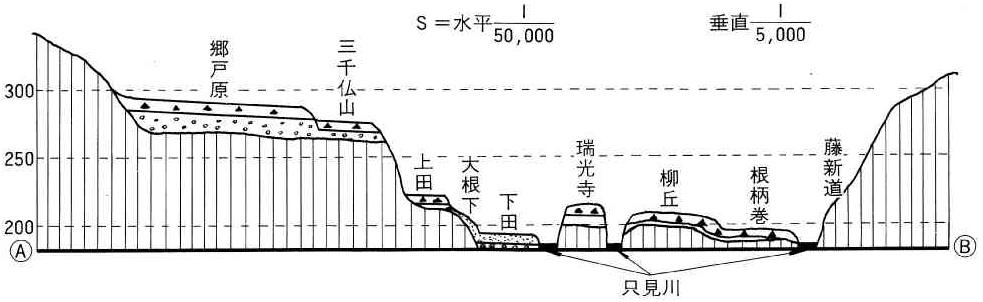


只見川沿岸の段丘分布図

断面図を見ると現在の只見川は標高一九〇メートルの下位にあるが、郷戸原は標高二九〇メートルの高位にあって、只見川の侵蝕が約一〇〇メートルに及んでいる。

柳津附近は段丘の標高より見れば上位段丘としての郷戸原・三千佛、中位段丘としては上田・瑞光寺・柳丘、そして下位段丘としての下田地区は沖積層の若い堆積地となっている。上位、中位の段丘はいずれも上部は沼沢火山の影響をうけた浮石層（シラス）があり、その下は砂礫層の堆積が見られ、基盤は凝灰岩である。

又一王町の墓地・つきみが丘・瑞光寺公園・向館は共に標高が同じで中位段丘に属しているが河川の侵蝕により現在は残丘として分断され残っている姿である。



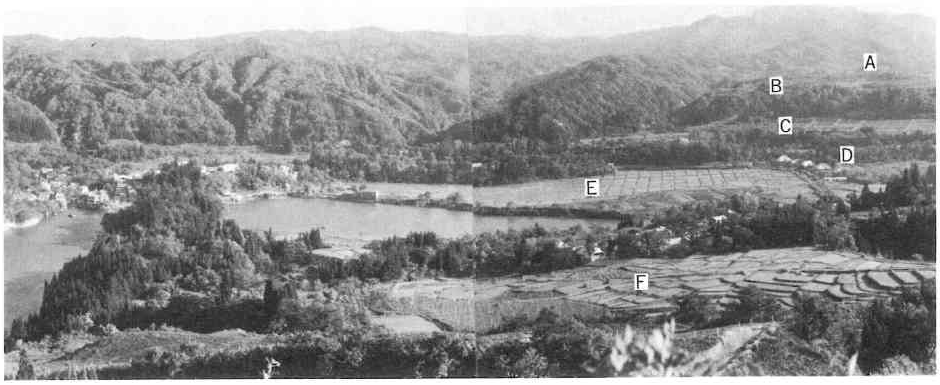
河岸段丘断面図（石神→藤新道）

(三)　段丘と生活舞台

段丘は平坦にして生活舞台としては太古の昔より好条件であった。日照時間は長く、清水に恵まれ、大小の河川は近くにあり、狩猟・漁業に便があった関係上、原始時代から居住していたことは、縄文・弥生時代の遺跡もすべてこの段丘に限られている。

現在において水田は勿論その他の耕作はほとんどこの広い平坦な段丘が整地され、基盤整備等が早く着手され、柳津町における水田・畑地耕作の中心的役割を果している。

又道路の改良・鉄道の敷設等すべてがこの段丘を利用して発達している。



A＝郷戸原段丘
B＝三千仏段丘
C＝上田段丘
D＝二本木段丘
E＝下田段丘
F＝板沢扇状地

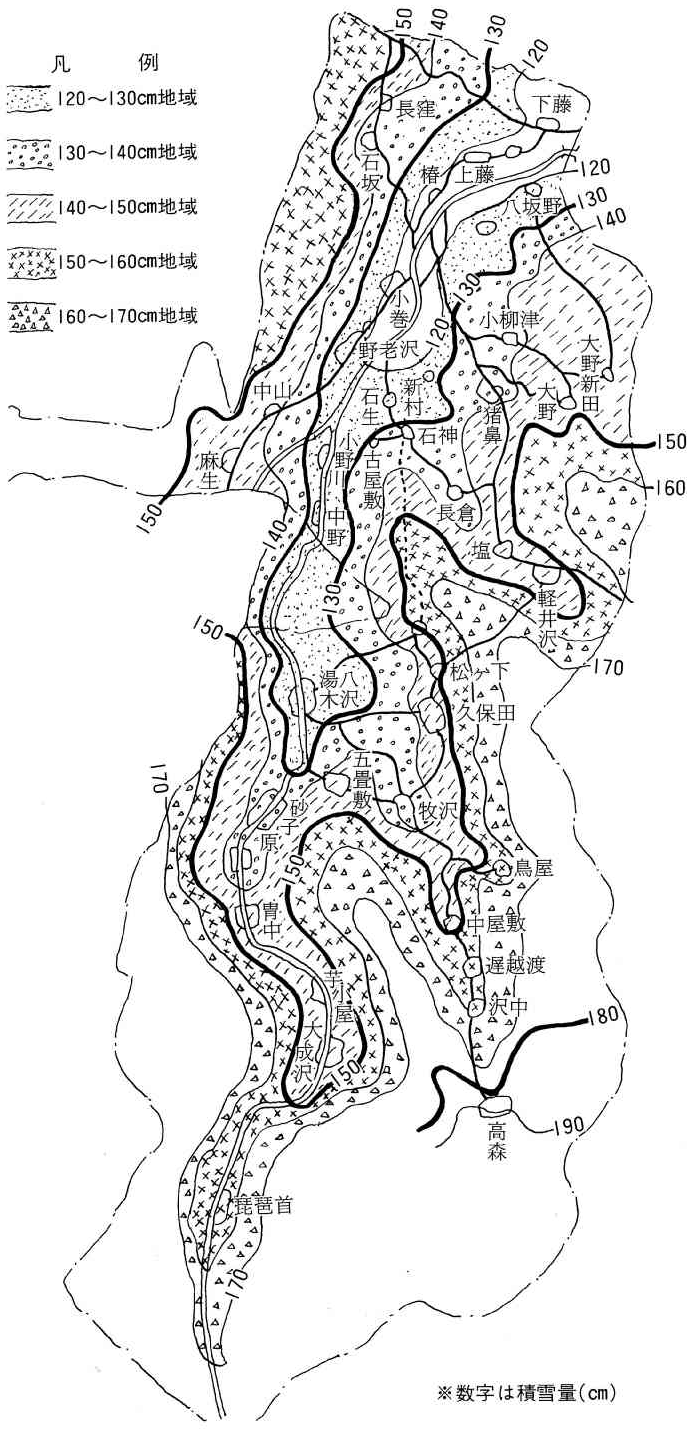
柳津の段丘群

第三節　雪と風土

(一)　季節風と雪

日本全体の季節風は東アジア共通のものであるが、その特色は夏の季節風は雨をもたらし（梅雨）、稲作の上には欠くことのできないものであるが、時には梅雨あけに集中豪雨になり水害の現象が見られる。

しかし冬の季節風は雪を持って来て、裏日本一帯に降雪することになるが、反対に脊梁山脈の東側（表日本）は晴天続きのカラカラ天気となって対象的な現象が見られる。柳津町は地形的に複雑であり更に標高差も著しく、降雪量の分布も著しい差異がある。昭和四十一年二月に各地点（側点約二五〇箇所）の積雪量を測定しているが、その分布図は左記の図の通りである。

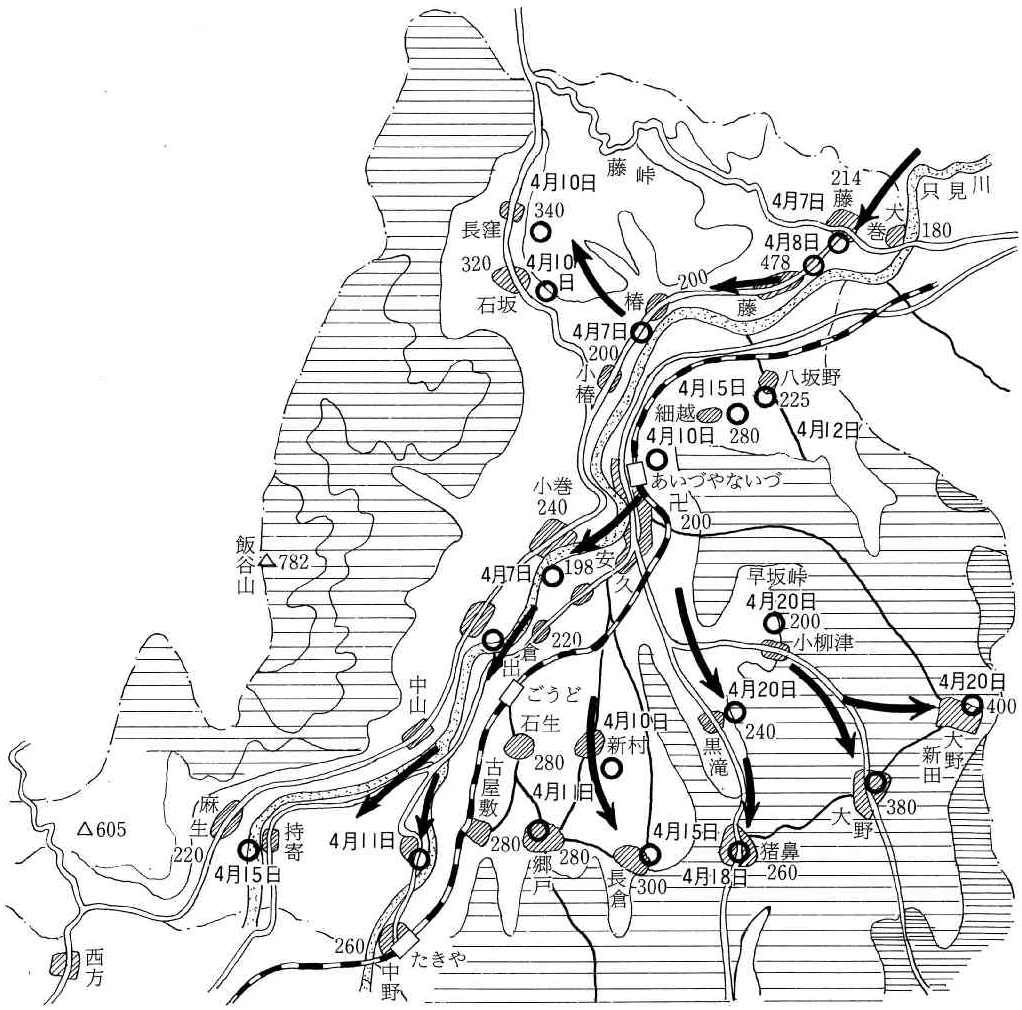


積雪分布図（昭和41年２月下旬）

(二)　河べりは雪が浅い

前頁の図によると、標高よりも河川が積雪量と非常に関係のあることがわかる。すなわち只見川流域で川の近くは比較的浅い。又滝谷川に臨んでいる湯八木沢は比較的積雪量が少ない。同じ郷戸原でも長倉附近は地形的にも、又風向(北西風)のために比較的深雪地域である。石坂・大野部落は標高も関係あるが地形的に所謂袋状であるので雪が深い。又藤・小巻・野老沢・砂子原等は日照時間が長く南面しているので降雪量があっても融雪期が早いことがうなずける。砂子原は標高も高く降雪量は多いが融雪期は柳津(上村)とほとんど同じである。

降雪という自然現象は人間の生活にもあるいは生物の生活の上にも極めて密接な因果関係のあることがわかる。それは燕(つばめ)の飛来する時期について調査して見ると興味ある生態が見られる(下記の図参照)。標高や地形、河川の流れとの関係を見捨てるわけにはいかない。



燕の飛来する時期(昭和16年調査・学童による)

(三)　長い雪国

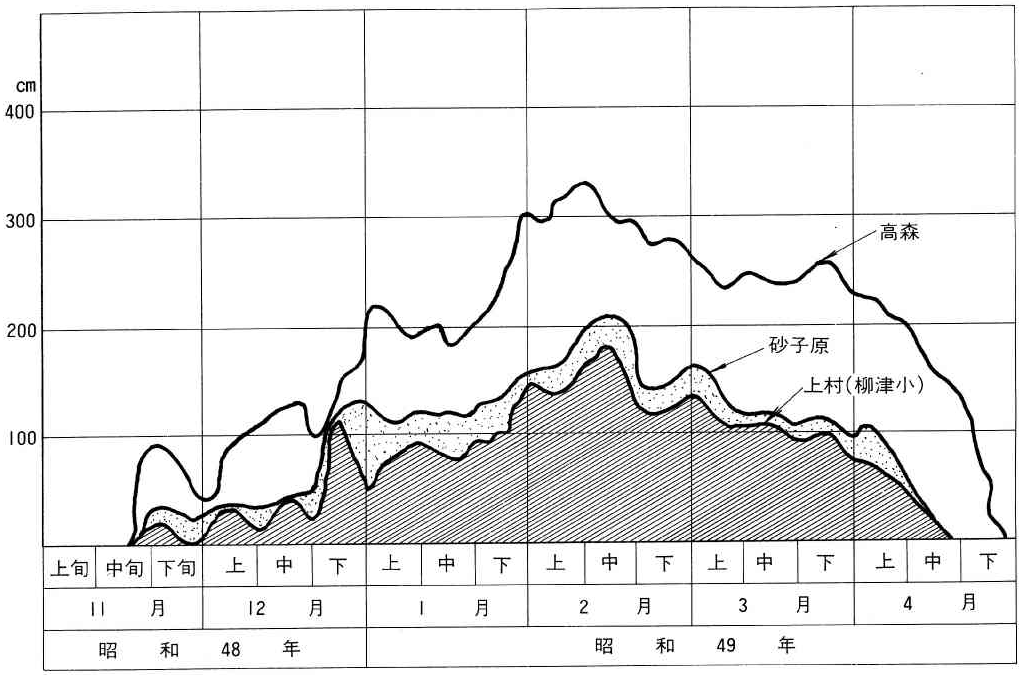
毎年十一月の中旬から下旬になると初雪が降る。博士山や高い山は十月下旬に降雪がある。飯谷山は十一月の上旬になると雪化粧をする。「飯谷山に三回雪化粧すると平地に雪がやって来る……」と古老は経験の上から言い伝えているがよく当る。初雪は毎年消える。昔からその初雪が降って来ないと本格的な雪囲いができないと生活経験から割り出している。

十二月中旬になれば「根雪」と称してあとは消えない。一年の中約六か月は生産活動が停止して冬眠状態に入るのが柳津町の宿命であった。この自然現象をどう開発してゆくかが今後の課題である。

月別降雪量一覧表

（単位：cm）

測点＼年度		11月	12月	1月	2月	3月	4月	計
門前	46	20	85	70	156	48	18	397
	47	17	138	231	148	83		617
	48	39	339	318	143	101	12	952
	49	2	128	330	189	40		689
柳津小	46	20	85	70	156	48	18	397
	47	17	138	231	148	83		617
	48	27	172	278	173	113		763
	49	2	291	428	223	48	10	902
軽井沢	46	30	118	147	236	97	27	628
	47	62	171	367	233	200		1,033
	48	87	463	560	349	142	20	1,621
	49	5	355	280	339	50	8	737
石坂	46	28	121	122	236	120	30	657
	47	54	208	277	227	151		917
	48	75	421	384	305	146	15	1,346
	49	5	293	445	280	50		983
砂子原	46	45	175	109	228	99	33	689
	47	65	208	374	279	230		1,156
	48	89	345	310	283	131	28	1,186
	49	15	252	338	155	47	25	832
琵琶首	46	50	190	200	300	110	35	850
	47	112	240	395	354	325		1,435
	48	251	390	550	325	155	25	1,696
	49	10	376	469	387	87	20	1,349
高森	46	50	205	226	375	120	45	1,021
	47	110	267	445	473	390		1,685
	48	310	489	682	397	242	38	2,158
	49	20	299	454	363	101	20	1,257
久保田	46	40	150	170	345	110	40	855
	47	80	287	272	291	362		1,292
	48	141	456	564	371	232	30	1,794
	49	19	435	654	471	136	30	1,745



積雪量比較グラフ

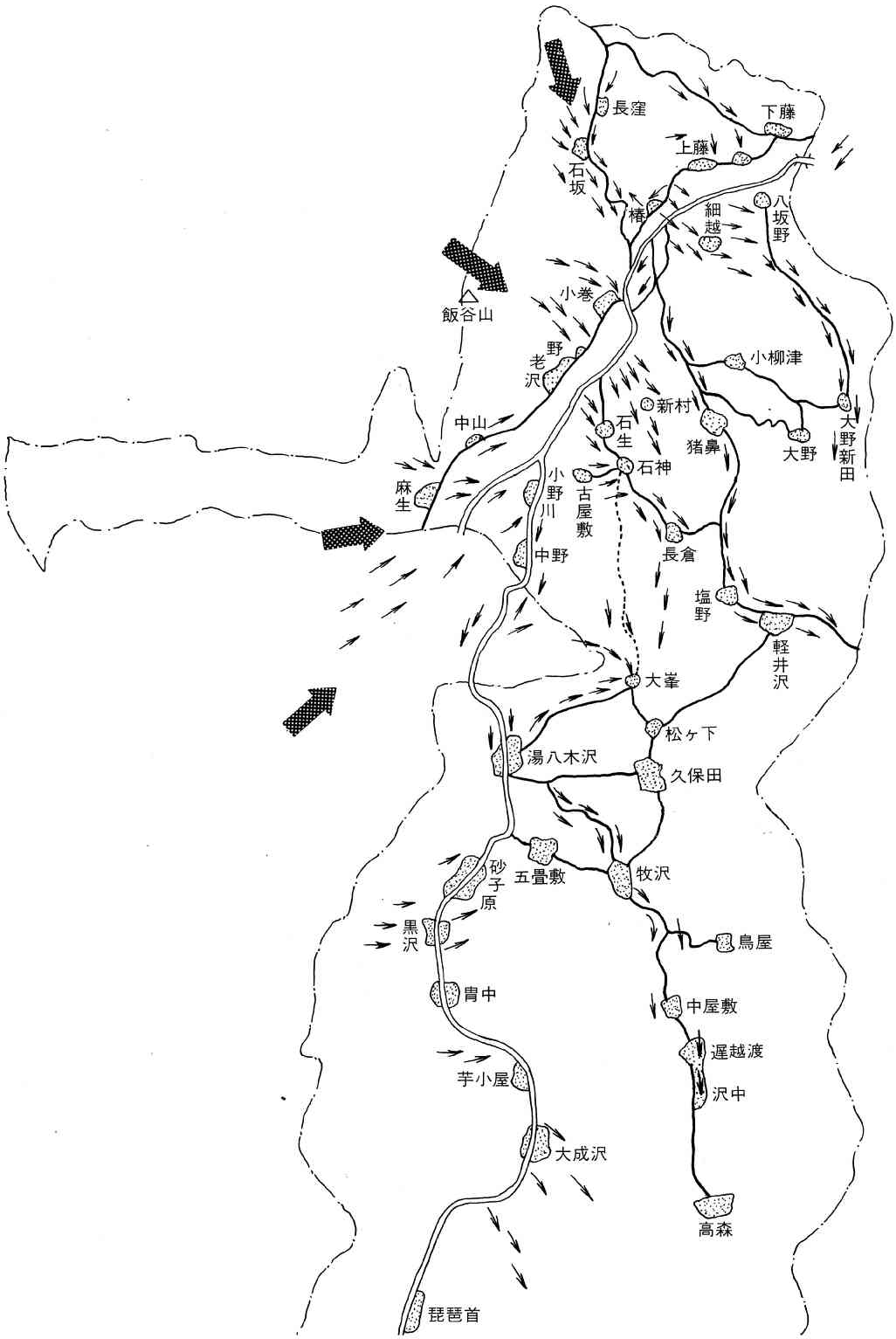
(四)　柿の木の枝振り

柿の木は各地に分布する樹木であって、又よく風向に順応する性質を持っている。その枝振りを調査すると風向（特に卓越風）がよくつかむことができる。風向は地形と深い関係を持つことはこの調査によって肯定されるところである。主要風向は飯谷山を越える季節風（飯谷山の北斜面に雑木の見事な枝振り現象がある）と、越後山脈を越えて只見川を下る風が特徴的である。そして柳津全域は人手型の谷が卓越して、その谷の下流から上流に向っての風向が見られる。

降雪現象・燕の飛来する時期・柿の枝振り等が、よく一致して柳津町の風土性を動植物の生態は説明してくれている。

更に河岸段丘の先端斜面は植物の枝振りの偏向が顕著であることは、直進して来る風向の最も影響する部分であるので、段丘の耕作上に留意すべきであることを自然は警告を発している。

卓越風と樹枝（いちょう）



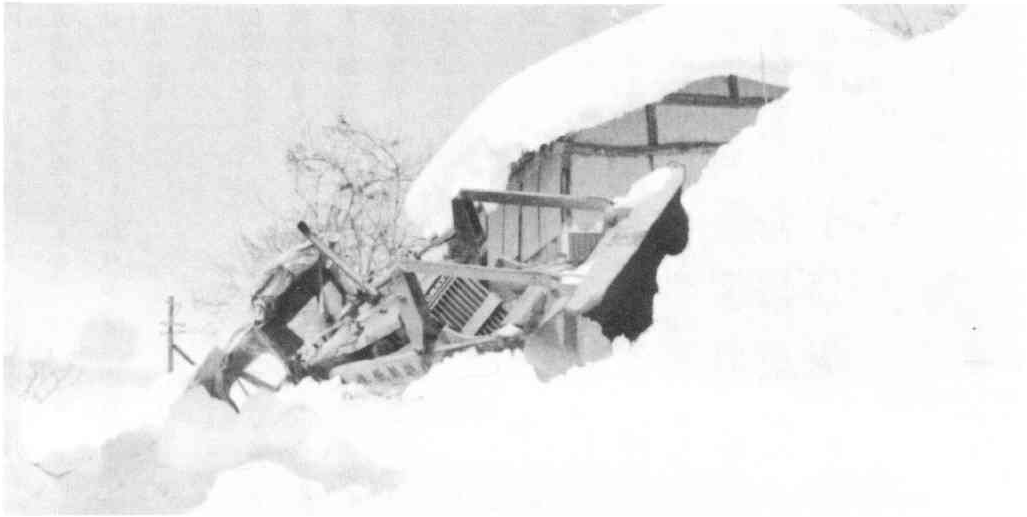
柿の木の枝張りによる風向推定図(昭和41年３月調査)

雪に埋まる大成沢(昭和49年2月)

除　雪　用　具

屋根よりのしかかる豪雪(西山中体育館・昭和49年2月)

雪に埋まる公民館（昭和49年２月）



除雪に活躍するブルドーザー（軽井沢・昭和49年２月）

第四節　地名と風土

(一) 柳津（ヤナイヅ）の地名

只見川の河岸は古来楊柳が多く生え繁り、明治時代頃迄はその大木は処々に見られたが年と共に切り倒され、今や発電所のダム竣工により無数の川原柳が河底に埋没した。

大同の頃、南岩坂（今の柳津）の河岸に三本の大柳があり船の発着所であったので柳津の地名が起ったといわれている。ただし神明鏡（作者不詳天文九年成）には梁井戸と書いてある。柳津の記録は此頃から始まる（山内為之輔氏談）。

当時は蜷川荘柳津邑で、後世蜷川は稲川と変り、郡・郷・荘の称呼が乱れてから柳津郷と呼ばれた時である。

又古代は阿賀川及び只見川は会津川と呼ばれた。

日本の地名の中で「柳津」の地名が四か所あり、その発音はいずれも「ヤナイヅ」である。そしていずれも河川に臨むか或は旧河川か、或は海に面して津の形態をなしている点から見ると、舟運との関係の深い地名である。

又柳津は「楊津」の文字を用いた時代もある。即ち楊柳からの文字を引用したと見られる。

① 柳津（ヤナイヅ）＝福島県「只見川」
② 柳津（ヤナイヅ）＝宮城県「北上川支流」
③ 柳津（ヤナイヅ）＝岐阜県「長良川」
④ 柳津（ヤナイヅ）＝広島県「瀬戸内・松永湾」

柳津（ヤナイヅ）の分布図

(二) 地籍地名

柳津全域の字切図を見ると、大字（おおあざ）の中に大小さまざまの字名（あざめい）がある。その区画も開拓の進んだ地域程細かに分割されている。その中には地形上から来る地名や宗教上の地名、開拓上の地名等があって柳津の風土や文化を表現している。その意味に於て地名は一つの文化財と見てもよいと思われる。

〔藤〕

大巻（オウマキ）　龍越（リュウコシ）　滝ノ上（タキノウエ）　三ケ尻（ミカジリ）　石神（イシガミ）　藤沢（フジサワ）　家ノ下（イエノシタ）　川前（カワマエ）　古市（フルイチ）
下原（シモノハラ）　関根（セキネ）　宮ノ下（ミヤノシタ）　森沢（モリサワ）　上山道東（ウエノヤマミチヒガシ）　上前道西（カイノマエミチニシ）　三十刈（サンジュウガリ）
葉木山（ハノキヤマ）　下森沢（シタモリサワ）　大久保（オオクボ）　菅沢（スガサワ）　砂子田（スナゴダ）　松ケ崎（マツガサキ）　沢向（サワムカイ）
上松ケ沢（カミマツガサワ）　舟渡（フナト）　胡桃清水（クルミシミズ）　水上（ウシカミ）　牛越（ウシゴエ）　中居平（ナカエダイラ）　宮西（ミヤノニシ）　前田（マエダ）
六百刈（ロッピャクガリ）　宮後（ミヤノシタ）　沢田（サワダ）　生木原（ナイキバラ）　大田（オオタ）　姥懐（ウバフトコロ）　中丸（ナカマル）　二岐（フタマタ）　杉倉（スギノクラ）
滝額（タキビタイ）　大日向（オオヒナタ）　柴倉（シバクラ）　塩峯（シオミネ）　三五沢（サンゴザワ）　檀腰（グンコシ）　長窪（ナガクボ）　沢入（サワイリ）
家ノ上（イエノウエ）　牛ケ曽根（ウシガソネ）　森（モリ）　谷地（ヤチ）　横手（ヨコテ）　雨沼（アマヌマ）　滝ノ下（タキノシタ）　長久保（ナガクボ）
小屋久保（コヤクボ）　鶴ケ峯（ツルガミネ）　外出口（ソトデグチ）

〔小　椿〕

下川前（シモカワマエ）　二百刈（ニヒャクガリ）　下家前（シモイエノマエ）　宮ノ前（ミヤノマエ）　登等（ノボリト）　二階平（ニカイダイラ）　沢上（サワガミ）
宇津尾坂（ウツビザカ）　石佛（イシボトケ）　キワダ窪（クボ）　上宮前（カミミヤノマエ）　中川前（ナカガワマエ）　上川前（カミカワマエ）　上家前（カミイエノマエ）

立石　下立石　源重山　二タ山　大畑　上平　萱立場　九日田
峠　宇津野　袖山　山中　沢尻　牧平　坂ノ上　家ノ前　萱刈
石畑　北山　上ノ台　川原　宮ノ越　大平　北川　長窪境　田入
北俣　切窪　椿境　鳥居戸　瑞光寺　大巻　段越　滝留　向館
下ノ巻　瀬額　巻ノ孫　蛇崩　城戸場　城戸　打入　丸山
丸山新田　杉ノ平　上竹山　村中　下平　古屋敷　芳添　中子山
山新田　沢向　中竹山　下竹山　仏生原新田　上後ケ沢　仏生原
後ケ沢　穴釜　岩倉　中岩倉　南久保　板下　菖蒲沢　山ノ神山
大久保　足久保　戸山　上北山　下北山　相沢　上立石
再新発田　壱貫清水　山畑　下岩倉　桐沢板

〔飯　谷〕

下川原　明神前　七廻　前林　野竹　上川原　稲荷宮　薬師免
堂平　堂泉　けいろは　猿額道南　猿額道北　中道　惣沢　沼端
中ノ山　栃窪　高平　滝ワグ　上烏　宇津野　下烏　黒山　峠
天狗岩　宮ノ下　鱒畑　下飯谷　惣兵エ田　安摩　板卸　窪
抜間　巻平　田中　社倉沢　宮田　新町　沢入　小水上　鹿島
中曽根　菅ノ平　飯谷山　飯谷　袖窪　牛ケ沢　山家　高イ堂
稗田　程ケ尻　中山　大窪　兎ケ窪　林ノ上　柳沢　中在家
馬場　大日　三十刈　小畑　松木平　横手　一ツ田　田中　中丸
居平　芦久保　峠山中平　谷地中　三ツ石　地蔵畑　大久保
後山　芝倉　蛇石　前坂　大開き　柏木平　柿平　杉峠　殿栗
樫尾居平　元樫尾　長根　黒男山　村上　居平　下川原　高瀬

〔細　八〕

大巻　下川原　細坂　川前　鴇巣　三十刈　家ノ下　下中沢
一ノ沢　一ノ沢向　聖上　上中沢　横手　原屋敷　西ノ沢
苅千場　程窪道西　家下　宝　沢向　居平　谷地平　下平
根柄巻　堺　上平　堂前　清水尻　上林　池尻　宮上　原前
前林　里寺　松沢　原屋敷　東沢入　林日　丸山　原山　西沢入
中曽根　東沢入　袖山　大岩下　二十平　程窪　大中曽根　柳平
北口　大平　小中曽根　馬立　花立　金子平
西向平　大竹里　守林　新田　小田ノ平　中平　小田　下遠面
上平　田ノ下　中遠面　上遠面　原　細田　田ノ上

〔柳　津〕

下原道西　下原　下原東下　下原東上　下大平　檀ノ下　下川原
檀ノ浦　井戸尻　上大平　川原　下中平　上中平　鶴渕　大平山
岩坂町　堂森山　堂林　菅理沢　寺家町　門前町　地蔵堂山
中在家　山ノ神　諏訪町　新町　十二所　一王町　上川原
下荒町　大岩山　上村　村ノ上　上村道上　八幡坂　安久津
鳥井戸　下平　梅田　家ノ下　家ノ上　満々田　堰西　上村道下
薬師堂上　薬師堂下　矢蔵山　打越　子持石　落合　打越山
長倉沢東山　柏木山　長倉沢　長倉沢西山　袖ケ沢山　袖ケ沢
姥ケ沢　三千仏山　東坂上　沢向　地蔵前　堂前道西　堂前堂東
東坂上道東上　東坂上道東下　龍蔵庵　上在家　大根下シ
金谷沢　塩ノ半在家　稲葉山　阿弥蛇堂　阿弥蛇堂東　堤田

上千刈田　カニ田　狐塚山　二本木　舟山　下千刈田　石生沢
石生沢山　上田平山　八升蒔　頭梨　西原道東　大安久津
大安久津山　家ノ北　家ノ北山　川前山　川前　家ノ前
家ノ上山　家ノ上　松倉山　宮ノ前　地蔵前　百刈　宮ノ下
三十刈　宮ノ上　二本木山　下平　上田　八ツナガサ　郷戸道
谷地　梨平　西原道西　柳添　孫大夫作

〔大　柳〕

大昆羅　ヤケン沢　大豆背坂　木ナメジリ　大平山　石地蔵
七森　上ヤケン沢　上ノ曽根　中曽根　山中　白バッケ山
落合　下ヤケン沢　香森山　向山　宮前　坂下　鳥居山　土橋
大苗代　薬師堂前　後山　後東山　板沢山　山岸　板沢　井戸向
宮林　鳥屋　松山　沢　三十刈　蟹沢　石畑　下居平　川原
栗木沢　和具　八森　手倉林　後沢　下分　森下　梨木沢
滝ノ上　杢ノ沢　綱木　六角　上一〆山　下一〆山　上坂ノ下
荒田　中島　向田　家ノ下　楯ノ上　新田前　家前　万才　追窪
山中　北原　小窪　前ノ沢　堤場　大窪　茅沢　館ノ越　屋敷添
下山岸　松坂　西ノ沢　上山岸　餅ケ沢　出戸半蔵　入半蔵
宮林　笹窪　馬立　大袖　高坂　盆農　問答　若林　袖山
内畑口　内畑　岩下　四十刈　下小屋　南原　伊古田原　菖蒲沢
釜ケ沢　崩沢　蕨平　上ノ窪　古屋敷　堤ノ下　中井戸尻　坂下
峠山　上曽根　上井戸尻　白バッケ

〔猪倉野〕

柏木一ノ和久　柏木二ノ和久　中新田　小原　下前沢　上前沢
下林　中丸　寺山　苗木畑　兎沢　中田　菖蒲沢　塩沢　中根沢
二百刈　下川原　松坂　楢木沢　下餅ケ沢　上餅ケ沢　下里道
深田　前沢　畑福　横道　林窪　上畑田　畑　ヒエ田　菅ノ沢
上里道　滝ノ入　ガバガ沢　前坂　上山下　越戸下　渋田入
田中　北角　七夜張　猪鼻道下　馬場　七呼　大越　家ノ上
日向　田向　萱ノ窪　舘ケ曽称　沼田　沼下山　長面　五斗畑
古屋敷　湯ノ沢　細窪　社倉　狐塚　小豆坂
ウツノ　桑原　宮下　向田　中村　松原　山子平　大高森　ス沢
平田山　切払　越戸山　柳平　舟窪　仙戸山　長曽根　石畑
大平　大窪　南山　西向　重次屋敷　セノキ沢　ヘブス畑　矢柄
桜坂　百五十刈　仙道山　一本木　高森　畑子沢　蛭田　寺沢原
舞台田　赤谷　苧附場　笠松　八幡　小沢　南原　中丸　屋敷添
宮ノ下　太田　北原　明登原　稲荷原　井戸尻　コゴリ原
原田ケ沢　中原　東原　姥コロバシ　下沢向　中新田　猪鼻道
崩レ　四百刈　峠　宮前　柳平　下細田　上細田

〔郷　戸〕

小栃窪　栃窪　中山前　川口原　川口　中崎　中崎上　小井戸
大戸沢　中平　川口中平　牧ノ内　小野川　所窪　蟹沢山　蟹沢
沼端　細窪　長右エ門畑　高平　高平下　峠持寄境　雨落沢
小屋場　萩田　請前　槻木沢出口　下林　机ケ森　原ノ窪

上滑沢　西窪　峠　石生上浦　西川口原　滑沢林　狐塚　前林
臼窪　板橋　丸山　今泉下平　段窪　今泉上平　休場　小曽根
上留　へツリ下　三十刈　へツリ上　横道　廻り道　上休場
古屋敷　供養壇　外手　中原　狐塚　東川口原　柳平　下定倉
上定倉　定倉　滝沢口　前田　長〆　下吹上　上吹上　岩下
館山　中曽根　笠松　滝沢　上ノ山　居平　前原　小坂　沢田
新田場　沢道　大平　滝ノ脇　藤沢　上藤沢　石生沢　小曽根
石生下　石生前　石生上　上石生沢　石生下東向　井戸尻
箱清水　清水上　下石生沢　東板橋　二本木　堂前　下蛇沢
柏葉木　石生谷地　森谷下　赤谷中　赤谷坂下　赤谷下　石生
ヤチ屋敷　二十四石　遠稲場　清水上　清水　三才分　米野沢
米野　堰下林　西原　石神浦　中丸　沢田　菅田　石生下西向
小在家　福徳尻　南林　西窪　道西　下滑沢　西新田場　石神
石神東　前田　川前　花田谷地　寺ノ下　花田山　花田　山田
丸山　丸山前林　水上　後山　芦ケ沢　南芦ケ沢　滝ノ花　牧堀
蛇沢　南蛇沢　館山　入山　西又　上大平　寺窪　中山　沼畑
東又　政木　上藤沢　矢柄折　東新田場　東原　石神下　堤林
西山　東山　矢柄

〔軽井沢〕

上後山　下後山　横向　小松根　向田　岩下　川原田　炭ノ千戸
峠後　沢下　山中　西路　沢田　中島　宮ノ前　北向　笠松　沢
狸入　狸沢　出口　下新田　追分　土倉　鬼堀田　森　下川
墓下　新田　追越柄　中土倉　大土倉　越田　御屋敷　強清水
物掛　馬場　高曽根　塩ノ前　釜場　南　下新田　沢入　上沢入
北向　宮前　西口

〔久保田〕

丸山　背戸山　北原　沼平　若林　坂下　雉ケ沢　滝ケ沢
南坂下　早稲田　越後　四十刈　下原　蒲ケ沢　殿山　宮ノ上
的場　南沢　牛コロバシ　東原　松林　源崖　西勝峠　雨岩
反田　押山　松ケ下　古市　沢道　北向　味屋敷　二百刈　萩窪
畑ケ　半坂　居平　上ノ宮　大林　高尾峯　椚　畑ノ平　立山
杉山　南田表　田表　畑タ　前沢　尻田　三百刈　南中村　一盃蒔
下居平　大向　柳津畑　向山　下平　沢下　上山　萩窪　立岩
下柳津畑　居平　畑平　下林

〔湯八木沢〕

大廻戸　新湯向　傾城沢　家東　稲面　沼田　半坂　居平　馬場
上新田　谷地　前坂　崇座後　天ケ滝　栂原　木戸ケ沢　舞台
桃ケ沢　萩ノ平　川向　殿山　下新田

〔五畳敷〕

建曽根　十文字原　下ノ湯　居平　老沢　村ノ上　前田　前新田
細田　影畑　長坂　宮ノ後　柳津畑　三百刈　久根の内　荒湯

〔砂子原〕

湯ノ下　湯ノ岳　南嶽　沼田　簾沢　上林　水上　北ノ沢
小六平　長坂　崖下　夏伏　老沢　下平　山界　上平　居平

長窪（ナガクボ）

〔黒　沢〕

千石（センゴク）　向山（ムカイヤマ）　谷地平（ヤチダイラ）　孫三畑（マゴミハタ）　山子沢（ヤマネザワ）　下黒沢（シモクロサワ）　前原（マエバラ）　川原田（カワラダ）
五升蒔（ゴショウマキ）　簾沢（スダレザワ）　葉木平（ハギダイラ）　京都窪（キョウトクボ）　松橋（マツバシ）　二岐（フタマタ）　入矢麻（イリヤマ）　孫七沢（マゴシチザワ）

〔胄　中〕

山城（ヤマシロ）　片平（カタヒラ）　月滝（ツキタキ）　家ノ上（イエノカミ）　若林（ワカバヤシ）　外出（ソトデ）　居平（イダイラ）　小杉（コスギ）　牧（マキ）
萬ノ沢（マンノサワ）　上野（ウエノ）　滝原（タキハラ）　腰巻（コシマキ）　滝原平（タキバラダイラ）　出入（イデイリ）　日影平（ヒカゲダイラ）　根堀葉（ネボリバ）
岩沢（イワサワ）　大石（オオイシ）　堺沢（サカエノサワ）　コノミ沢（コノミザワ）　菅田（スガノダ）　小屋沢（コヤザワ）　山ノ神（ヤマノカミ）　狐戻（キツネモドシ）
大持上（オオモチカミ）　樫（カシ）　松原（マツバラ）　下原（シモハラ）　大窪（オオクボ）　宮上（ミヤノウエ）　雨沼（アメヌマ）　桑畑（クワバタケ）　葛沢（クズザワ）

〔大成沢〕

宮前（ミヤノマエ）　船窪（フナクボ）　岩沢山（イワサワヤマ）　滝ビト（タキビト）　上石空（カミイシソラ）　大岩（オオイワ）　岩下（イワシタ）　清水山（シミツヤマ）
栗平（クリダイラ）　山ノ上（ヤマノウエ）　居平（イダイラ）　芋小屋（イモゴヤ）　柳島（ヤナギジマ）　宮ノ上（ミヤノウエ）　上川原（カミカワラ）　下原（シモバラ）
平六平（ヘイロクダイラ）　前田（マエダ）　滝ノ上（タキノウエ）　ブナ山（ブナヤマ）　中平（ナカダイラ）　中曲沢（ナカマガリザワ）　上曲沢（カミマガリザワ）
ゾロメキ（ソロメキ）　越渡（コシド）　ヤヂバ（ヤヂバ）　広表（ヒロオモテ）　井戸尻（イドジリ）　向山（ムカイヤマ）　裏山（ウラヤマ）　袖向（ソデムカイ）
井戸入（イドイリ）　上村（ウワムラ）　博士ヘツリ（ハカセヘツリ）　日影沢（ヒカゲザワ）　大谷滝（オオヤダキ）　大堀沢（オオホリザワ）　畑ケ沢（ハタガサワ）
小谷滝（コヤダキ）　小屋平（コヤダイラ）　高平（タカダイラ）　入大谷滝（イリオオヤダキ）　杉山（スギヤマ）　博士（ハカセ）　芋小屋向（イモゴヤムカイ）　曲沢（マガリザワ）
谷滝（ヤダキ）

〔琵琶首〕

両ノ倉山（リョウノクラヤマ）　下谷地（シモヤチ）　中谷地（ナカヤチ）　上谷地（カミヤチ）　遅ノ平（オソノダイラ）　家ノ向（イエノムカイ）　横曽根山（ヨコソネヤマ）
中井向（ナカイノムカイ）　杉山（スギヤマ）　鈴倉山（スズノクラヤマ）　場良山（バラヤマ）　黒岩山（クロイワヤマ）　獅子落（シシオトシ）　堂ノ平（ドウノタイラ）
高畠山（タカハタヤマ）　居平（イダイラ）　中平（ナカノダイラ）　板橋沢山（イタバシサワヤマ）　平中（ヒラナカ）　胡桃平（クルミダイラ）　石上山（イシガミヤマ）　鹿沢山（シカザワヤマ）
下平（シモダイラ）　上琵琶（カミビワ）　柱下（ハシラシタ）　森平（モリダイラ）　坂下（バンゲ）　境ノ沢（サカエノサワ）　中井（ナカイ）　博士山（ハカセヤマ）
東松山（ヒガシマツヤマ）　古屋敷（フルヤシキ）　一ノ平（イチノダイラ）　シブ屋敷（シブヤシキ）

〔牧　沢〕

沢下（サワシタ）　川下（カワシモ）　臼窪（ウスクボ）　菖蒲沢（ショウブザワ）　居平（イダイラ）　堂ノ下（ドウノシタ）　後沢（ウシロザワ）　渋田（シブタ）　沢上（サワノカミ）
向居平（ムカイイダイラ）　栗平（クリダイラ）　大向（オオムカイ）　向入山（ムカイイリヤマ）　滝替（タキガエ）　袖山（ソデヤマ）　宮ノ前（ミヤノマエ）　鳥屋居平（トヤイダイラ）
横道（ヨコミチ）　魚留（ウオドメ）　勝負平（ショウブダイラ）　小向（コムカヒ）　入山（イリヤマ）　山境（ヤマザカイ）　上堂ノ下（カミドウノシタ）

〔四ツ谷〕

水上（ミノガミ）　大平（オオヒラ）　材出（ザイダシ）　芋沢（イモザワ）　境沢（サカイザワ）　ブナ向（ブナムカイ）　小橋沢（コバシザワ）　御越（オコシ）　ブナ平（ブナダイラ）
下風呂地（シモフロチ）　松原（マツバラ）　下宮ノ原（シミヤノハラ）　中登戸（ナカノボリト）　大向（オオムカイ）　外出（ソトデ）　猿倉沢（サルクラザワ）　唐沼（カラヌマ）
中平内沢（ナカヘイナイザワ）　牧平（マキノダイラ）　西向（ニシムキ）　蕨坂（ワラビザカ）　上平（ウワダイラ）　中宮原（ナカミヤハラ）　井戸入（イドイリ）　中居平（ナカイダイラ）
平内沢（ヘイナイザワ）　登戸（ノボリト）　向（ムカイ）　川向（カワムカイ）　居平（イダイラ）　寺ノ入（テラノイリ）　滝沢（タキサワ）　負出入（マケデイリ）　下後嶽（シモウシロダケ）
日影（ヒカゲ）　四本ブナ（シホンブナ）　後嶽（ウシロダケ）　平沢（ヒラサワ）　床並（トコナミ）　山鳥目（ヤマドリメ）　櫛平（カシダイラ）　宮ノ原（ミヤノハラ）
大型小屋（オオガタゴヤ）　的場（マトバ）　家ノ上（イエノカミ）　腰巻（コシマキ）　宮ノ上（ミヤノカミ）　登戸（ノボリト）　上居平（カミイダイラ）　中島（ナカシマ）
沼端（スマノハシ）　松倉山（マツクラヤマ）　岩下（イワシタ）　嶽山（ダケノヤマ）　西向（ニシムカイ）　羽木平（ハンキダイラ）　魚留（ウオドメ）　長窪（ナガクボ）
上形小屋（カミガタゴヤ）　下形小屋（シモガタゴヤ）　下宮原（シモミヤハラ）　寺ノ上（テラノウエ）　家ノ廻（イエノマワリ）

(三)　私称地名

地籍地名と共に郷土には地図には記されないが土地の人固有の口伝えにとなえている地名がある。（鏡味完二氏によれば「地籍地名」「私称地名」「山川の地名」に区別されている）

ホイ坂＝石坂にホイ坂と口伝えられている坂がある。「ホイ・ホイ」と上るからこの名があるといわれているが、それを上ると法印屋敷がある。そこで法印坂のことではあるまいか。

オツコシ＝一王町にある。ここは洪水等に水がその場所を乗り越

えて来た場所で、よく風土を表現した地名であろう。

マヤ＝摩谷、即ち魔の谷であろう。特に崩雪の危険の場所で遭難の多いところの地名。

ニラヤマ＝韮山であろう。琵琶首にある自然の韮が自生している。琵琶首は冷害の被害の多かったところで食と戦って来た歴史を持つ。その意味で貴重な地名であろう。

道海泣き尾根＝博士の登山道にある尾根で、僧道海が山を開き布教の折り、この峻しい場所で苦労したことが地名として残る。

マルハカ＝円墓で黒沢にある。これは古代の円墳かも知れない。

ゴテンバ＝御殿場であろう。ここを通る者はかつて藤の薬師如来を遥拝したと伝えられたことから、由緒ある地名として今も残っている。

こうした地名は各地に見られる。そして、それは伝承として受け継がれ住民の生活と共に育って来た地名と見てよかろう。

(四)　山川の地名

「地籍」「私称」の外に「山川の地名」がある。こうした地名も風土との関係において見ることは意義のあることである。

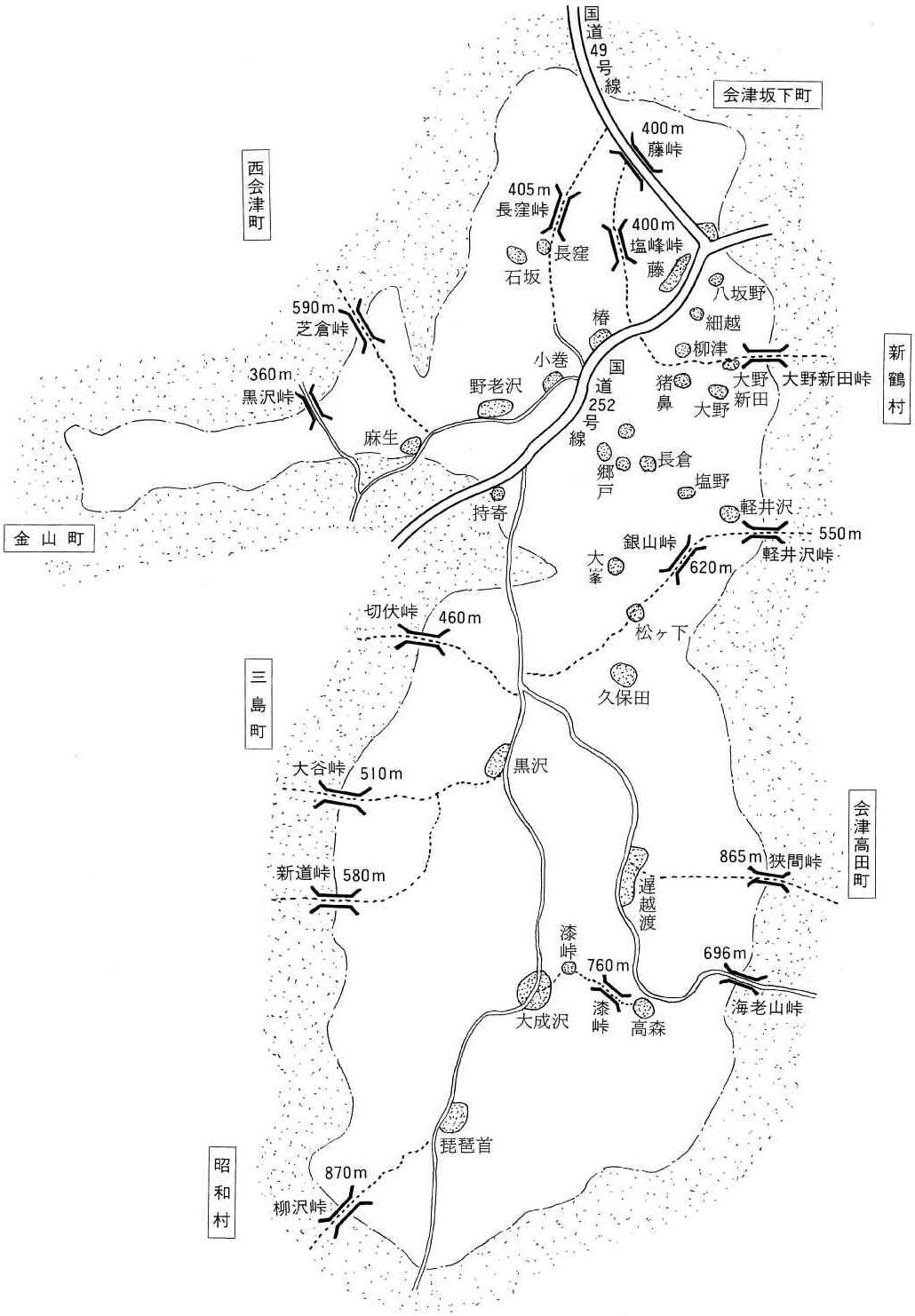
山や川の地形と共に鞍部である峠もまた土地の人の生活に密接な関係があったものとしてその地名が意義があったが、現在の交通路線の発達と共に簿れて来る淋しさがある。

「川の地名」

下藤川(藤)　ざご沢(椿)　沢尻川(椿)　桑沢(椿)　柳沢(椿)
小巻沢(小巻)　板沢(野老沢)　黒山沢(野老沢)
上田沢(野老沢)　ひびし沢(麻生)　うば沢(麻生)
袖山沢(樫尾)　地獄沢(八坂野)　八坂野川(八坂野)
東沢(細越)　糸滝沢(門前)　銀山川(黒滝)　大柳川(小柳津)
竜蔵庵川(竜蔵庵)　滝谷川(湯八木沢)　木戸ケ沢(湯八木沢)
樺ケ沢(湯八木沢)　日暮沢(湯八木沢)　傾城沢(湯八木沢)
東川(四ツ谷)　老沢(五畳敷)　猿倉沢(砂子原)
すだれ沢(砂子原)　居利矢麻川(黒沢)　川下沢(久保田)
二百刈沢(久保田)　苧畑沢(胄中)　鵞ノ沢(胄中)
まぎの沢(胄中)　下沢(芋小屋)　杉山川(大成沢)
博士沢(大成沢)　小谷滝沢(大成沢)　大谷滝沢(大成沢)
南沢(大成沢)　沢中沢(沢中)　東沢(九々明)　清水畑沢(高森)
松倉沢(高森)　出入沢(琵琶首)　下平沢(琵琶首)
鹿沢(琵琶首)

「山の地名」

場良山(九二〇)　志津倉山(一、二〇七)　横曽根山(九八六)
博士山(一、四八二)　石喰山(九一五)　岩渕山(九八六)
高森山(七〇四)　道山(六〇九)　岳山(一、〇三七)
大向山(一、〇四三)　猿倉ケ岳(九〇七)　明神ケ岳(一、〇七四)
高尾嶺(八六九)　湯の岳(七二九)　上大平山(四五一)
馬立山(四八八)　大平山(三九六)　飯谷山(七八二)
田林山(六五〇)　日向倉山(六〇五)　黒男山(九八〇)



他地域と結ぶ道（峠）（数字は標高）

(五)　地名とその意味

地名は何か意味があって発生したものであるが、その由来を堀り下げ解明することはむずかしい問題である。しかしその中で類型的に集めて見ると共通点もあるので、そうした角度からながめて見るのも一つの研究方法である。次に若干柳津町の地名を考えて見ることにする。

〔地形との関係深い地名〕

大巻　滝ノ上　川前　牛越　長窪　鶴ケ峯　キワダ窪　蛇崩
沢向　曽根　バッケ　笹窪　峠山　牛コロバシ　長坂　崖下
岩沢　博士ヘツリ

柳津町は複雑な地形であるので、この地形からの地名が非常に多い。

〔交通上の地名〕

舟渡　牛越　段越　峠　杉峠　打越　落合　郷戸道　峠山　七呼
舟窪　沢道　板橋　後越　越渡　獅子落

〔住居地に関係した地名〕

古市　居平　古屋敷　中在家　原屋敷　上在家　塩ノ半在家
屋戻添　下小屋　重次屋敷　小屋場　小在家　御屋敷　味屋敷
小屋平　鳥居居平　ヤチ屋敷　次郎右衛門新田

〔耕地の広さを意味する地名〕

二十刈　六百刈　二百刈　三十刈　二十平　千刈田　八升蒔
四十刈　四百刈　二十四石　三百刈　百五十刈　一盃蒔　五升蒔

〔宗教上に関係した地名〕

宮田　三千佛　石佛　仏生原　瑞光寺　堂平　稲荷宮　薬師免
明神前　門前　寺家　一王町　十二所　薬師堂下　石地蔵　宮前
鳥居　宮林　宮下　八幡　稲荷原　供養壇　石神　寺窪　崇座後
山ノ神　堂ノ下

(六)　特異な地名例

阿久津(アクツ)＝安久津の地名は所々にある。この地名は「安久津」「阿久津」「悪地」と色々の漢字を使用しているが、従来は悪地の意味があって、どうも悪の字は適当でない。中には強盗等の悪者が棲んでいた場所と推測したり、或は「津」の文字から交通上に考えたりするがそうではないらしい。新鶴村の阿久津は扇状地の上に乗って豪雨期の水害の場所になっており柳津町の安久津は只見川の屈曲点にあって洪水にさらされた場所であることから、水害との関係から考えられる集落である。附近に追越(オッコシ)の地名と深い関係が考えられる

野老沢(トコロザワ)＝野老(トコロ)とは山野に自生する宿根草で、山の芋、すなわち自然薯(ジネンジョ)に似ていて、苦くて堅いが、苦味をぬけば食べられる(山中襄太氏地名語源辞典による)。野老沢附近の山野にこの芋が自生し、それを食用にした時代があったのではあるまいか。埼玉県の所沢も古書には野老沢と書いたといわれているところから共通点がある。

現在野老沢において、春の彼岸にその野老(トコロ)を佛前にあげる

習俗がある。

藤と椿＝どちらも植物よりとった地名と見てよかろう。藤の附近の河岸や藤新道附近に、初夏の頃見事な藤の花が見られる。

又、椿附近はユキツバキが見事に分布している。そのユキ椿は只見川沿岸に分布しているが、椿附近が東限になっているかも知れない。

田代と軽井沢＝田代は鏡味完二氏によると「田をこしらえた所すなわち新田、高山の湿地をなす小平地」「シロ」は丘上や山腹の平坦地と説明している。柳田国男氏によれば「其字義か推しても又その所在が多く入野の奥であることを考えてもともとはただ水田適地……」と説いている。

そうしたことから、水田の開墾地と深い関係からの地名であることが想像できる。

軽井沢は他の軽井沢と峠路の麓にある共通性がある。又、それが涸渓（カレサワ）とも或は水源涸渇の地域とも関係があるかも知れない。今は西会津になったが「軽沢」の場所もよく似た場所である。そして、柳田国男氏は田代と軽井沢の両地が相接近していることを次に指摘されている。

伊豆田方郡函南村大字軽井沢
同　同　大字田代
岩代大沼郡東川村大字軽井沢
同　同　大字田代
羽後雄勝郡田代村大字軽井沢
同　同　大字田代
羽後北秋田郡十二所町大字軽井沢字軽井沢
同　同　大字葛原字田代

（柳田国男『地名の研究』より）

(七)　地名と風土

柳津町には地籍からの地名、或は土地の人の通称としての地名、河川や山の地名など数多く見られる。そのどれをとって見ても柳津の土地と非常に関係が深いものであって地名と自然、人間の相関を表現し、歴史や文化の上に深いかかわり合いを持っていることをこの際再認識したい。その意味において、地名は一つの文化財として残したいものである。